

どく戀に交際つてゐた。

「やあ、Monsieur le Page (お小姓殿)」とマレウスキイは云ひ初めた。

「此處でお目にかゝれて大變に嬉しいです。貴君の美しい女王様はどうなさいましたか？」

彼の生々とした晴々しい綺麗な顔も、此の瞬間には非常にいとほしかつた。彼は蔑視するやうな嘲笑するやうな目ざしで私を見たので、私は變な氣がして、返事さへしなかつた。

「貴君は相變らずの御立腹ですか？」と彼は語り續けた。

「然しそれは御無理でせう。貴君を小姓にさせたのは私ぢやありませんから、それに、お小姓といふものは、特別に女王様のおそば近くに侍つておらねばいけませんね、失禮な申し分のやうですが、貴君はお役目を蔑ろにしてゐらつしやいますな」

「何故そんな事を仰有るんです？」

「お小姓は女王様から離れてはいけません。で、お小姓は女王様のすることなすこと残らずを知つてゐなくてはならないのみならず、女王を見張つてゐる必要が充分あるんですね」

とそれから彼は一段と聲を低めてつけ加へて云つた。

「夜も、晝も——」

「一體はどんな意味なんですか？」

「え、どういふ意味かと仰有るんですか？ では明瞭に云ひませう。私の考へてゐることは斯うなんですよ。もちろん晝の間はまあどうでも差支えありませんがね、——晝間は明るいし、人が居ますから。けれど、夜になると——忽ち機會がやつて來ますよ。で御忠告をする次第なんです、貴君は不寢番といふ格でもつて、即ち夜はまんじりともしないで見張つてゐなくてはなりませんよ。出来る限り眼を強くしてですね。記憶してゐらつしやるでせう——庭で、夜分、噴水のそばで——そうした處に待たせて伏せてゐなくてはいけませんよ。必ず貴方は私に感謝なさるもののあることを御存知になるでせう」

マレウスキイは笑ひ出した。そして私に背を向けた。多分彼は私に言つたその言葉に何等大きな期待を持つたのではあるまい。彼は人を迷はせることに妙を得てゐるといふ専らの評判があつた。そして彼は假裝舞踏會で人を騙弄する術に長じてゐた。斯る時に、彼の魂を蔽つてゐる無意識的作用が殊の外効があつた……彼は唯だ私をからかはうとしたのだ。然し彼の言葉の一つひとつは私のあらゆる血脈に毒を流しこんだも同じやうであつた。血は頭に通ひよく溯つた。

「あゝ、そうだ！」と私は獨りごとを言つた。

「うん、昨日の俺のある豫感は實際だつたんだ。庭に惹きつけられて行つたのも當然な事なんだ！なに、そんな事があつて堪るもんか！」

私は絶叫して胸を拳でたいた。しかし、何かあつては堪らないのかをいふことは出来なかつた。「事によると、マレウスキイ自身が庭に来るんぢやあるまいか」

と私は思つた。(事實彼が自分の事をさらけ出して了つたのかもしれない。まづたく彼奴と來たらばそんな事をしかなない男だからな。)

「それとも、誰か別の人だらうか……(我々の庭の牛垣は非常に低いんだから、それを乗り越える位は、なんの困難も感じないんだ。……が、俺の手中に陥込む奴があつたとしたらば、そんな不幸な奴はあるまい！誰でもいいから俺に出つ選はさないやうにしろ！俺は、全世界に、彼女に、かの裏切者に)私は彼女の事を屢々「裏切者」と呼んだ。復讐し得ることを教へてやらう！」

私は自分の部屋に歸つて、机の中から最近買つたばかりの英吉利小刀をとり出して、鋭い刃先に觸れてみて、冷やかな、不屈の決心を懷いて、額に皺をよせて、懐中に入れた。こんな事は一向珍らしくはなく、又、これが最初でもないといつたやうな素振りだ。

私の心臓は石のやうに固く重たく感じられた。私は終日眉毛を陰氣に翳め、唇をかみしめて、絶へ

ず歩きまはつてゐた。鋭い小刀を懐中に確つかと握りしめて、何にか恐ろしい或るものに抗ふ用意をしながら。此の新たな、不可解な感情は全く私の心を囚にして、其の上愉快な氣持を起させた。で、私はジナイイダのことはあまり思ひ出さなかつた。私の頭には絶へずかの若いジブシイのアレコの事が往來してゐた。

「美しき若人よ、

何處に行くか？

此處に止まれよ」

そしてそれから、

「汝の全身は血塗みれなり……

おゝ、若人よ、汝は何をなしたか？

……何にもものをも……」

私は、如何に恐ろしき微笑みを洩らして
「何にもをせす！」を繰りかへしたであらう？

父は家に居なかつた。しかし常に亢奮状態を續けて在つた母は、私の思ひきつた態度に気がついて私に訊いた。

「お前は何故鼠か挽割麥を覗ふやうな、陰氣そうな眼で睨むてゐるんです？」
私はその答として、たゞ憐憫のやうな微笑をして、そして考へた。

「もしも彼女等が氣づいたとしたならばどうだろう！」

十一時が打つた……私は部屋に這入つたが、着物は脱がなかつた。そして眞夜中を待つた。遂ひに其の時が來た。

「時間になつた！」

と私は吃きつゝ咽候のところまで釦を締めて、そして袖をまくし上げて、庭に下りて行つた。

私は既に見張りをしやうとする位置を定めて置いた。庭の端のザシエキン家を私たちの庭との境界線になつてゐる垣根が、共同の壁によりかゝつてゐるところに、一本の寂しい樅の木が立つてゐる。その木の低い枝の繁茂した下から、夜の闇を通はして、周圍の一切の事物を極めてよく見ることが出

來る。其處には、私が常に訝しく思つてゐたところの一條の小徑が蟠つてゐた。その小徑は垣根に浸つて、蛇のやうにうねつて迂つてゐたが、此の小徑を通つて、よく繁つたアカシアの丸い茂みの方に片寄つたらしい形跡があつた。私は樅の木近く歩み寄つて、その幹に凭れ様子を注意しはじめた。夜は前夜のやうに以前として靜かであつた。空には少し許りの雲しかなく、木立の輪割や、背の高い草花までが、極めて明かに見ることが出來た。待ち構えてゐるその最初のうちは、胸を壓しつけられるやうで、殆んど恐ろしい位ひであつた。私はすべての事に對して決心をしてゐた。いきなりに斯う怒鳴らうか。

「貴様は何處に行くんだ？ 止め！ 白狀しないと貴様の一命はないぞ！」

それとも、黙つてゐて突きかゝらうか……

あらゆる物の響き、あらゆる響き、そしてすれあふもの皆なが、私に意味ある、異様ななものやうに思はれた……私は用意した……身を屈めた……が、半時間は過ぎて、一時間もやがて過ぎた。私の感情は落着き、冷靜になつて來て、自分のしてゐることが、我ながら少々滑稽になつて來て、やがてマレヴスキイが私からかつたのではないかしらと思ふやうになつた。私は自分の地所を捨て、庭を通り過ぎた。其處には、故意にしたやうに、何處にも物の氣息が聞こゑなかつた。周圍のあらゆる

るものが休んでゐた。家の飼犬さへも繩に縛られたまゝ門の脇で眠つてゐた。

私は温室の廢墟に匍ち登つて、目のあたりに擴げてゐる曠野を見渡し、ジナイイダと會つたことを思ひ乍ら、それからそれへと追戀に耽つた……

と、私はきよつとすくみ上つた……扉の開かれる軌音を耳にした。それから木の枝を折る微かな細い音がした。私は全く喫驚りして、二足で廢墟を飛び降りて、じつと其處に立ちすくんだ。性急な、快活な、しかし用心深い歩調が庭から明瞭りと聞こえて來た。私に近づいて來た。

「來たぞ……來たぞ、とうとうやつて來やがつた！」
胸がぎくぐりとした。

私は痙攣的に小刀を懐中から取り出してそれをいそいで痙攣的に開いた。焔えるやうな赤い色が眼の前に閃く。私は恐怖と憤怒とで噴髪が逆立つた……足音は真直ぐに私の方を指してやつて來る。

私は屈んだ……一人の男が、目前に表はれた……あゝ、それは私の父であつた！

假令彼が全身を黒衣で蔽ひ、帽子を眼深に被つてゐたにもせよ、私は直ちにそれが父であることを知つた。父は足を爪立て、行き過ぎた、私は隠れはしなかつたが、父は私を發見しなかつた。けれども、私は小さく縮こまつて、地面にすれすれにまでしてゐた。嫉妬深い、殺害を企圖してゐたオセロ

は勿ちにして學生と變化して了つた。私は父が不意にやつて來たのにすつかり、度膽を抜かれて最初父が何方の方面から來て、何處に立ち去つたかを知らない程だつた。父の姿が全く消えて了つてから後、はじめて私は起き上り、そして考へた。

「一體何んだつてお父さんは此の夜中に庭なんか散歩してゐるんだらう？」

一切の物象が、再び靜寂に立ちかへつた時、驚きのために小刀を草の中に落して了つたことを知つたが、それを見出そうともしなかつた。私は私自分が非常に耻しくなつて來た。私は俄かに大變に臆病になつて了つた。

けれども、家へ歸へる途すがら、私は接骨木の下の自分の腰掛の傍に行き、ジナイイダの姿を眺めた。少しく突き出てゐる、小さな窓の圓板が、夜の空から抜けられる鈍い光線に青く輝いてゐた。突然、その色が變つた……その背後に——私はそれを見た確かに認めたのだ——靜かに用心深く、白い卷帷が下された。それは恰度窓板のところまで下りて、其處で留つた。

「これは何の意味なんだらう？」

私は再び自分の部屋に歸つた時に、無意識に高らかに叫むだ。

「夢かしら、偶然なのかしら、乃至は……」

突然私の腦裡をかすめたある感じは、私がそれに考へ耽ることを敢てしなかつた程に非常に新奇なものであつた。

十八

朝起きると頭痛がした、昨夜の亢奮は跡方もなく消えてはゐたが、その代り鈍い疑惑と、今まで少しも味ひ知れなかつた悲哀とが私を襲つた。私は或るものを失つたやうな気がした。

「何故君は、腦髓の半分を切り取られた兎みために、ちつと見てゐるんですか？」

とルウシンは私に會つた時訊いた。

朝食の時、密かに両親の顔を交るがはる見た。父は常の如く落つきはらつてゐたし、母は常のやうに亢奮してゐた。私は父が時折親しげに接してくれるそれに今日も接しないだらうかと希つて坐つてゐた。しかし父は常の如く冷やかな顔つきで私をみてゐた。「ジナイイダに皆んな打明けて了はうかしら？」

と思は思つた……

「それはもう皆んな同じことなんだ。もうすつかり減茶苦茶なんだ……」

私は彼女の處に行つたが、何にも云つて呉れないばかりか……私が非常に希望してゐた、彼女と話をすることも出来なかつた。公爵夫人の令息で、十二才位ひの幼年學校生徒が、休暇でベテルスブルグに歸省してゐた。ジナイイダは直ぐに私に紹介した。

「私の可愛いウオロヂヤさん……(彼女が私に斯う呼びかけたのは初めてであつた)……」

「あなたのお仲間が出来ましたよ」と彼女は云つた。

「是れも矢張りウオロヂヤといふんですの、どうぞ愛してやつて頂戴、腕白者は腕白者だけど、それは氣立てがいゝんですのよ。どうかネスタチニイ公園を見せてやつて下さいな。一緒に散歩に連れ立つて、保護してやつてね。ウオロヂヤさん、さうして下さるでせう？ あなたはほんとに好い方ですもの」

彼女は兩手を懐し氣に私の肩に置いた——そして、私はすつかり周章てしまった。この少年の到着が、私をも亦子供に變へて了つたのである。私は黙つて幼年學校生徒を眺めてゐた、彼も同じく黙つて私を眺めてゐた。ジナイイダは笑ひ出して、私たちを互ひに抱き會はした。

「さあ、抱き合ふのよ、子供たち！」

私たちは抱き合つた。

「庭に行きたかつたらば、一緒に連れて行つて上げませうか？」

と私は幼年學校生徒に訊いた。

「あなたさへ御都合がよかつたらば、どうぞ」

と彼は腹がれた聲で……正しく幼年學校生徒の聲で……答へた。

ジナイイダは又もや笑ひ出した。私は未だ會つて一度でも、彼女の顔にこれほど魅力のある紅潮を見たことがない。私は幼年生と一緒に遠ざかつた。

私たちの庭には古い、ブランコがあつた。私は彼をその細い板の上に乗せて、そしてそれを揺りはじめた。彼は厚ぼつたい布製の廣い金の縁をとつた制服を着、微塵揺きもせずにと、確りと繩につかまつてゐた。

「襟の釦をはづしたらどうです」

と私は云つた。

「いえ、僕等は始終中ですから平氣です」

と彼は云つてから、咳嗽こむだ。

彼は姉によく似てゐて、特に眼などはそっくり其の儘であつた。私は彼に出来るだけの心やりをす

るのが愉快ではあつたけれども、同時に、暗澹とした憂鬱や、哀愁が靜かに私の胸の裡に蔓つていつた。今ではもう自分の事をすっかり子供だと考へるやうになつた。

「しかし、昨日……」

私は昨夜驚願して失つた小刀の事を思ひ出して、それを探しはじめた。幼年生は私の小刀を貰ひ、うどの木の莖を切り取つて、それで笛を作り、吹き出した。オセロも一緒になつて吹いた。

しかし、この同じいオセロも、其晩は泣いてゐた。そして、ミーマ・ジナイイダは私を庭の隅で見付け出した、何故そんなに悲しいの？ と訊いた。私は彼女が驚く程非常に烈しく泣いてゐたのである。

「どうしたの？ ウオロヂヤさん」と彼女はくり返へした。私は返事もせず、又泣き止みもしなかつた。彼女は私の濡れた顔に接吻をしようとした。しかし私は身を振りきつて、なきじやくりの下から云つた。

「私は残らず知つてますよ。何故貴女は私を弄んだんです？……あなたは私の愛を何うしたんです？」

「妾、すまないことをしたわね、ウオロヂヤさん」

とジナイイダは云つた……

「妾ほんとに濟まないことをしたわ……」そして彼は両手を組み合せてつけ加へた。

「まあ、何てふ性悪な、陰残な、罪深いものが妾の裡に棲くつてゐるんでせう？……けれど、もうきつとあなたを弄びはしませんよ。妾はあなたを愛してよ……あなたには、それが何處理由、如何なる事か、お解りにならないかもしれないけど……けども、あなたは何にか知つてゐらじつてよ……」

私は彼女に何を云ふことが出来るんだ？ 彼女は私の面前に立つて、私を眺めた……私は彼女を眺めたのみで、直ちに頭为天邊から足の爪先まで彼女の囚になつてしまつた。

十五分も経つてから、私は幼年生やジナイイダと一緒に驅けつくらをしてゐた。私の腫れ上つた睫毛からぽろりと涙が落ちた。けれども、もう私は其の時は泣いてはゐなく笑ふやうになつてゐた。私は襟飾の代りに、ジナイイダのリボンを頭に巻いて、彼女の胸衣のまはりにつかまつた時には、暗々しく叫ぶやうになつた。彼女は私の好むがまゝにいろいろなことをしてゐた。

十九

私の殆んど失敗に終つたといつてもいい、眞夜の遠征後の一週間の私の身の上につつたあらゆる出来事を詳細に話せと言はれたらば、私は大きな困惑に陥ることであらう。それは不思議な、熱病に罹つ

た時のやうな状態であつた。全然正反對になつた感情や、畏怖や、希望や、感激や、苦痛やが、暴風のやうに渦巻く一種の混沌であつた。私は自らの心に一瞥をさへも敢えてしなかつた……勿論、十六才の子供であつた私が、自分の心に一瞥を與えられるものであつたならばであるが。私はもう何事に對しても、判断することの努力が失せ、晝間を能ふ限り、迅速に夜にしてしまつたいと力めたのであつた。が、それに反して、夜は眠つた……此の場合、自分の子供らしい軽卒が頗る都合よかつた。私が彼女に愛されてゐるかどうかは知りたくは無かつた。又私が愛されてゐない事をも心に云ひたくはなかつた。私は父を避けてゐた……けれども、ジナイイダを避ける事は不可能であつた……私は彼女の前に出ると火のやうに眞赤になつた……が、心の身の内に燃え、私の心を蝕みつくした火が、如何なる焔であつたかを知る必要はあるまい。燃えたり、浸蝕されたりするのは、私にとつては可成り快いものであつたからである。私は、自分の心をあらゆる印象に焼きつけてしまつた。自らを欺き、印象から身を翻へして、自らの豫覺のもとに前にひれふした……此の快働は、他のこととやうにそれ程永く續いてはゐなかつた。一つの落雷が、一切の事件を突如の間に片着けて、然して新たな軌道へと私をおしやつた。

ある日、長時間の散歩の後晝飯に帰宅した時、私ひとりで晝飯をしなくてはならないと聞いて驚い

た。父は外出してゐるし、母は気分が悪かつた、彼女は食事を取らないで、寢室に閉ぢこもつてゐた。召使たちの顔色で、たゞならぬ事が起つたことを私は気がいた……が、それをきき訊す程の氣に起らなかつた。しかし私にはフリッツプといふ若い友達があつた。彼は食堂の係をしてゐて、詩に熱情的の愛を持つてゐて、その上に又ギターをも弾いた。私は彼に訊いた。そして、父と母との間に恐ろし争ひの一幕が演じられたといふ事を彼から聞いた。……(女中部屋では些細な言葉にいたるまで充分より残らず聞き得るのである。その多くは佛蘭西語であつたけれども、小間使のマアシャは五年程巴里から來た裁縫女のうちに住んでゐたので、その話しの全部を了解したのである。……母は父に不忠實と、公爵夫人の令嬢と懇意になつてゐることを非難した。父は一切のうちはしきりに辯解してゐたけれども、軀て立腹して、同じやうに何にやら烈しく言つた。そして何にか「母の年」に就いて口を出したので、母は泣き伏して了つたのである。母は又、手形を老公爵夫人に與えたやうなことや、令嬢について同様不利なことを云つたので、父は彼女を脅かしたやうである。

「そして、其の不幸はみんな」とフリッツプは云ひつゞけた。

「ある匿名の一通の手紙が原因なのです。誰がそれを書いたのか解りませんが、けれども此の事件は世間には絶対に擴まるものではないと云ふことです」

「では何にかあつたんだな」

と私は漸く云つた。兩手足は固く硬ばつて心の底にはあるものが震へてゐた。

フリッツプは意味有り氣なまばたきして云つた。

「いえ、全く、此んな事は隠し了はせるものではありませんよ。又お父さんが此の一件でどんなに御用心なさつたところで、例へば馬車をたびたびお借りになつたり、其の他にも何にやかや人手が要るものですからね。逆も人手なしには何事だつて出来るものではありませんよ」

「私は、フリッツプを退けて自分の寢室に歸り寢臺に身を投げかけた。私は別にすゝり泣もしなかつた。次第にも感じなかつた。また、何時、どうした事かゞ是れが起つたかも知別に氣にかけもしなかつたし、私が、もつとすつと以前に、いち早く、此の一件の、いきさつを何故に了解しなかつたらうかとも驚きはしなかつた……のみならず、私は父に對して別に圓滿を懐かなかつた……私の聞き及むだ事は私の今の力ではどうしようもないのである。此の不意の出來事の發見は私を減茶苦茶にへし潰して了つた……一切の事は過去にいつて了つた。一切の花は一時にむしりとられ、打ちひしがれ、散りぢりにされ、踏み躪られて、私の身の周圍に骸となつて横はつてゐた。

翌朝、母は街に移轉すると云ひ出した。父は彼女の寢室に長い間一人きりでゐた。誰も父が母に何座事を云つたかはしらなかつたけれども、母はもう泣かなかつた。彼女は落着いてゐて、食事を求めた。然し、自分の部屋からは一步も外に出ず、又其の決心をも翻へしはしなかつた。

私は、其の日終日、歩きまはつてゐたけれども、決して一回とても庭にはふみ出さず、公爵家の方にも一瞥でも與えなかつた事を記憶してゐる。然し夕方、奇異な出来事によつた。これは、父が、マレウスキイ伯爵の腕をとつて、客間から控室に連れ出し、駭者の面前で冷やかに云つた。

「数日前に、閣下は其家で拒絶をされましたね。私は今此處で別にお説明申し上げようとは思ひませぬ。しかし、閣下が、私の家にもう一度御入來になつたらば、其の時は窓から投げ出すかもしれないやうな事をし兼ねないとも限らないといふことを申し上げるの光榮を有して居ります。閣下の御筆跡は私には大變氣に入りましたよ」

伯爵は挨拶をし、齒を喰ひしぼり、身を屈めて出て行つた。

アルバート街への移轉準備が行はれた。其處には私たちの家が一軒あつた。考へてみるのに、父自

身にしても最う別荘には留つてゐたくなかつたのであらう、けれども、父が母をして面白からぬ事をさせようとした事は明白である。萬事は穩かに、餘り急ぎもせず爲された。母は公爵夫人の元にも挨拶の使をやつて、自分が不快の折からの出度爲めにお目に懸る事が出来なくて、誠に残念だと言はせた。私は狂人のやうに歩きまはつて、そしてたつた一つの事を希望した。それは此の一切の事が出来能ふ限り一刻も早く結着がついて了ふ様にと。私には、僅か一つの考へを纏める事についても私は困難を感じてゐた。どうして若い女が……しかも公爵の令嬢が……こんな事をするところがあることを信じられるか。何とすれば、彼女はベロウゾロヴとでも結婚することが出来たのだ、又、私の父が獨身でない事を知つてゐるのではないか！ 彼女は一體何を希望してゐたのであらう？

「一體彼女は、その一切の未來を破壊して了ふ事を恐れなかつたのであらうか？ あゝ、そつだ！」

と私は考へた。

「これが戀愛だ、情熱だ、犠牲だ」

そして私は、ルウジンの言葉を思ひ出した。

「或る種の人にとつては、自分を犠牲にする事は楽しい事なのだ」

一度、私は家の窓の一つに、一個の白い點を見るを機會を得た……あれはジナイイダの顔であらう

か？ と私は考へた……それはほんとうに彼女の顔であつた。私はもうちつと堪えては居られなくなつた。私は彼女にお別れの「擲」をしないでは、彼女に別れる事は出来なかつたのである。私はいゝ時を見はからつて家に行つた。

客室では、公爵夫人の例の締りのない、氣倦るような挨拶で私を迎えた。

「まあ、どうして此處に早くからお移轉なさるんですの？」

と彼女は、一撮みの煙草を摘み取り乍ら、云つた。

私は彼女を眺めた。そして、心が晴々とした。フィリップのつかつた手形といふ言葉が私を苦しめた。彼女は何にも氣づかなかつた……少くとも私にはそのやうに思はれたのである。ジナイイダは、次の部屋から出て來た。黒い着物を着、蒼ざめて、髪はほどけた儘であつた。彼女は黙つて私の手ととり、自分の部屋に一緒につれて行つた。

「私、あなたの聲を聞いたのよ、」と彼女は云ひ出した。

「で、直ぐに出て來たのよ。私たちがお別れすることが、あなたには、其處に、容易い事なのでせうか？ あなたはほんとに悪い子供ね」

「私はお別れに來ました」と私は答へた。

「多分これが永久のお別れになるでせう。あなたは必つともうお聞きになつたでせうが、私たちは移轉するんです」

ジナイイダは、凝つと私を見つめた。

「そう、私聞きましたわ。私あなたの來て下さつたのを感謝しますよ。私もうあなたに會へないだらうと思つてゐましたの。私のこともう怒らないで頂戴ね。私、あなたを時々苦しめましたわ、けれど、私あなたが思つてゐらつしやるやうな女ではないんですよ」

彼女は身をそむけて、窓際に行つた。

本當よ、私はそんな女ぢやないの、私は貴方が悪く思つてゐらつしやる事はよく知つてゐますわ」

「私が？」

「え、あなたがよ……あなたが」

「私が？」

と私は悲し氣に繰り返へした。そして私の胸は依然としてはね退け難い、云ひしれぬ魔の力に支配されてゐた。

「私がですか？ ジナイイダ・アレクサンドロウヅナさん、嘘は言ひませんよ。あなたか何處ことをな

さうだが、どんなに私をお苦しめにならうが、私は、自分の此の生命の有るかぎり、永久にあなたを愛し、また尊敬しますよ」

彼女は急に振り向き、兩腕をさつと擴げて、私の頭を抱え、私に接吻をした。激しく、燃えるやうな熱づいた接吻。この長の別れの接吻は、誰人に向つて爲されたか、何んで私たちは考へてなぞおられようか、私はたゞ、その甘い味を食ほつてゐた。私は決して二度と斯様な接吻をしたことはないことを知つてゐる。

「さようなら、左様なら」

私たちはくり返えした……。

彼女は身を引き離して立ち去つた。私も亦其處を辞した。その、辭する際の感情を記す事が出来な
い、私はそれをくりかへすことを望みはしない。然し私は、若しも斯うした経験を味つた事がなかつたとしたらば、私は如何に不幸であつたらうかと思つた。

私たちは街に移轉した。私が、過去の出来事的一切を自分から引き離して、勉強に専念に身を捧げる事の出来るやうになるまでには随分の日時を要した。私の胸の傷は徐ろに癒えていつた。しかし、元來私は父に對して別に激しい感情を懷きはしなかつた。いやその反對に私の眼には、父が却つて大

きくなつて、表はれたのである。……心理學者は、出来るだけ此の間の矛盾をよく説明するが宜からう？

一日、私は遊歩場を歩いてゐた。其の時、ルウシンに出遇つて筆紙にも盡し難い歡喜を感じた。私は彼は卒直な、純然たる性格があるので、彼を愛してゐた。且つまた、私の心中に眠つてゐたある思ひ出を呼び醒ましたので、私にはより貴重であつた。私は彼の方に駆け寄つた。

「あゝ」

と彼は言つて額に皺をよせた。

「やゝ、君でしたか、どうぞ君の顔を見せて下さい。あ、矢張り黄色ですな、しかしあなたの眼はもう、以前のやうには曇つてゐませんね。あなたは、立派な男子のやうに見えますよ。客室の犬みたいには見えませんか。それは何にしても結構な事です。ところで、君は今何をしてゐらつしやる？ お勉強ですか？」

私は溜息をついた。私は嘘を云ひたくはなかつた。しかし、眞實の事を云ふのを耻づかしく思つた。

「いや、聞ひませんよ」とルウシンは云ひつづけた。

「そう落膽なさらなくてもいいではありませんか。几帳面な生活に這入つて、戀愛などに耽らないの

が、人として何によりなんです、あんなことが我々に何んの役に立つんでせうか。彼塵ことをやつてゐると、何處へ浪がうち寄せやうと……それは常にいけないことです。男子といふものは、假令、小さな石の上であらうが、自分の足で立たなくてはいけないんです。御覺の通り、私は咳嗽をします……それからあのペロウソロウですね……君はお聞きになりましたかね？」

「どうしたのです？」

「あの男は、跡方もなく消えて了つたのですよ。何んでもカウカサス方面に旅行したと云ふ噂です。これは君にとつては、いゝみせしめですね。ねえ君、それといふのは、いゝ時分に見切をつけて、殻を破ることが出来なかつたからですよ。だが斯う見たところでは、君は幸福なことには飛び出さなすつたやうですね。二度と再び其の中に陥込まないやうに氣をつけなさいよ。では、君、さようなら」

「俺は二度とふたゝび陥らないだらう」

と私は考へた……「私は彼女にはもう決して遇はないだらう」

然し、私には、今一度ジナイイダを見るべき機会があつたのである。

二二二

父は毎日馬に乗つて出かけるのが常であつた。彼は細長い首と、細い足をした立派な赤毛の栗毛馬を持つてゐた。その馬はいくらしても疲勞することを知らなかつたが、非常に意地悪いやつであつた。人々は彼の馬の事を「エレクトリック」と稱してゐた。父の外には何人と雖も馬を御することが出来かつた。ある日、父は何日にもなく上氣嫌で私の部屋に這入つて來た。斯様なことは長い間なかつたことである。彼は馬で出かける用意をして、もう拍車の留金を締めてゐた。私は父と一緒に連れて行つてくれるやうに頼むた。

「それよりか、ポウランド型の木馬にでも乗つてゐる方がいゝよ」

と父は答へた。

「お前はあの裸馬に従いて來ることは出来やしまい」

「いえ、従いて行きますよ。私も同じやうに拍車に留金をつけて」

「では、お前のいゝやうにおし」

私たちは出懸けた。私は一頭の黒い房々と垂れ下がつた毛の小馬を持つてゐた。それは歩調は可成り整確で、加之に随分活潑であつた。元來エレクトリック一杯の並足で行く時には、私の馬は一生懸命に駆けなくてはならなかつた。然し、私は彼から遅れて取り残されるやうな事はなかつた。私は父

に比すべき程の乗馬家を見たことがない。父の姿勢は立派で悠然と、巧みに乗つてゐたので、まるで馬が彼の乗つてゐるのが一種の誇とも感じてゐるかのやうに見えた。

私たちは種々なる遊歩場を行き過ぎてから處女地に到り、幾つかの牛垣を飛び越え、(最初私はそれを飛び越すことが怖かつた。けれども、私は卑怯者を輕蔑した。それで私は恐れることを止めた)一度もモスクワ河を乗り越えた。私はもう家に歸る事だらうと思つた。私の馬がもう疲勞して來たことを父が知つたから、猶更そう思つたのである。ところが、突然彼はクリひの淺瀬の方へ曲つて岸に沿つて駈け出した。

私は父の後を追つた。私等が古い材木を積み重ねたところへ到着した時、彼は馬からひらりと飛び下りて、私にも下馬するやうにと命じ、私に馬の手綱を握らして、この材木の處で持つて居てくれと云つた。彼の姿は、ある曲り角で消えて了つた。私は馬を後に曳き乍ら、エレクトリツクを叱つたりして、河邊を彼方此方と歩きまはり出した。エレクトリツクは歩きつゝも絶へず頭を振り身を震はせて、荒々しい鼻息をし、いなゝいた。私が立ちとまると、一方蹄で土を蹴つたり、或はいないたりして、私の裸馬の首に噛みついたり、云はゞ性の悪い純粹の種馬みたいに振舞つてゐた。父は歸つて來ない。

河からは氣持の悪いじめじめした空氣が上つて來る。小雨が靜かに烟りはじめた。そして其處で行きつ戻りつして父を待つてゐた私は、非常に退屈し、馬鹿々々しくなつて來た。灰色の材木に濡らしては小さな黒い汚點をつけた。堪へ難い倦怠が私を掩つた。そして、父は依然として歸つて來なかつた。芬蘭土人の巡査が全身灰色で装ひ、頭に壺形をした、大きな古い革帽を被つて、鞍を持つたのが……(何の爲めにモスクワ河に一人の巡査が立つてゐるのであらうか?)……私に近づいて來て彼の老人のやうな皺の寄つた顔を私に向けて……

「旦那、貴方は此の馬を持つて此處で何をしてをいでますか? 手綱を私に下さい。持つて上げませう」

私は彼に一言も云はなかつた。彼は私に煙草をねだつた。彼から離れる爲めに、(それに又父を待つて苦しさもあつたが)私は父の消えた方向に數歩歩むた。それから私は、とある横丁を通りその端れまで行き、角を曲つて立ち止つた。私の約四十歩向ふに、父がある木造の、小家の開かれた窓のところ、往來に立つてゐた。父は私に背を向けて、上半身を窓の胸壁にもたせかけてゐた。窓掛によつて半分掩はれてゐる家の中には、黒衣を着けた一人の婦人が坐つて父と話をしてゐた。その婦人は、ジナイダであつた。

私は化石のやうになつた。白狀するがこれは全く私が全然豫期しない事であつた。私の最初に起つた考へは其の場から逃げ出すことであつた。

「若し父が振りむいたとしたら」と私の頭に閃いた。

「其時こそ、俺の運のつきだ」

しかし、ある不可思議な感情や好奇心よりも強い、然して嫉妬よりも偉大なる、恐怖より大なる、感情が私を引き留めた。私は見ようとした。立聽をしようとした。父は何事かを主張するやうに思はれた。ジナイイダはそれを承諾しないやうだつた。私は、今でもなほ、彼女の顔が目の前に明瞭りとして表はれるやうな氣がする……悲しそうな、眞面目な、美しい、名狀することの出来ない獻身と、苦惱と、愛情と、絶望との涯に沈むその表情をしてゐた彼女の顔……私は之れ以上の言葉を見出すことが出来ない。彼女は言葉短かく、きつぱりとした言葉で、目を上げないで、たゞ微笑した……身を委ねたやうな、といつて又反抗するやうに。

尙ほ、私は彼女の微笑から、昔のジナイイダを思ひ出した。父は肩をそば立て、帽子を被り直した。これは父が苛々した時によくやる習慣である。それから私は斯ういふ言葉を聞きとつた。 *Vain*

Devez separer de cette (あなたは、此處から遠ざからねばいけませんよ)

ジナイイダは立ち上つて、手を差し延べた……と、突然、私の目前に、信じる事の出来ない光景が演かれた。父は上衣の腰をはたいてゐた乗馬用の鞭を振り上げた……そして、肘のところまで露はした腕の上に激しく打ち響く鞭の鳴る音を私は聞いた。私はやつとの事で叫び出さない事が出来た……であつた。ジナイイダは身をふるはせて、黙つて父を眺め、それから、腕を靜かに唇まで持ち上げて、その赤くふくれ上つた鞭の傷痕に接吻をした。父は鞭を投げ捨て、急いで小さな段を飛び上り、家中に飛び込む。ジナイイダは振り向いて腕を差し延べ、頭を引いて同様に窓から遠退いた。

恐怖の爲めに呆然自失し、心中疑惑の恐怖を懐き、私は飛び退つて、横丁を駆け抜け、河邊に歸つて來た。

私は何にも理解出来なかつた。私の父が、冷靜を缺いて、屢々なされる、怒激の發作を知つてゐた……それにも拘はらず、私は、私が今みた事が理解出来なかつたのである！……けれども、私は此の時、同じく感じた事は、私の全生涯を通じて、ジナイイダの此の身振、この微笑を、決して忘れる時があるまい。また、彼女の姿態、この突發的に、目のあたりに表はれた、新しい姿は永久に私の記憶の裡に深く織込まれることであらう。と、私は無我の状態にあつて、じつと水の面を眺めてゐた。

そして、泪が頬を傳つてゐるものもしらなかつた。

彼女は打擲されたと思つた……打たれた……打たれた……

「おい、お前は何うしたのだ、馬を此方にお寄越し」

父の聲が、私の背後から聞こえた。

機械的に私は手綱を手渡した。彼は馬に飛び乗つた……凍えた馬は、棒立ちになつてゐたが、十呎も一足飛びに躍ねた。けれどもやがて父はそれを鎮めた。彼は拍車を馬の横腹に當て、拳で馬の頸を打つた……

「あゝ、俺はもう鞭を持つてゐないんだ！」

と彼はつぶやいた。

私は先刻聞いた鞭の音を、その拳の打つ音で思ひ出して、ぞつとした。

「何處に失つたのです？」

と短かい沈黙の後に私は訊いた。

父は私には答へず、駈け出した。私は彼に追ひついた。私はどうしても彼の顔を見なければ納まらなかつた。

「お前は、私を待つてゐる間に退屈をしたらう？」

と彼は口の中で物云ふやうに云つた。

「えゝ、少しばかり。何處で鞭を落したのですか？」

と私は再び訊ねた。

父は私を素早く一目見た。

「俺は落したのではない。投げ捨てたのだ」と彼は云つた。

父は物思はし氣になつて頭を垂れた……それから此の瞬間に、最初にして、又これが恐らく最後の彼の嚴格な顔に、如何に物優しき、もの寂しき表情とが現はれ得るかを見た。

再び父は駈け出した。そして私はもう追ひつくことが出来なかつた。私は父よりも十五分遅れて家に着した。

「これが戀なんだ」

私は考へ初めた、夜自分の机の前に腰を下ろした時に、机の上には再び手帳や本が出るやうになつてゐた。

「これが情熱なんだ……我々は誰の手からでも……假令それが愛人の手であらうとも……一撃を怒る

ことなくして身に受けることが出来るだらうか？……が、それにも拘らず、若し人が愛するならばこの事はたしかに可能なことである……そうだ。そして俺は……思ひ違ひをしてゐたのだ……」

この一月のうちに私は随分年をとつた。そして戀の亢奮や苦惱を以つて。他のあるものに比較するとしても、それは全く無意味な詰らないもの、稚氣臭いもの、虚無に等しいものだと思はれた。

そのあるものに就いて、私は些しも想像することが出来なかつた。そしてそれは、人が闇の中に未知の美しいものを捜すべく徒らな努力、脅威するやうな顔のやうに、私に恐怖の念を起させた……

その夜、私はほんとに不思議な夢を見た。私はある低い暗い部屋に這入つたやうな気がした……私は鞭を手にして其處に足をばたばたさせて立つてゐた。其の二隅にはジナイイダが蹲まつてゐた。そ

して……腕の上ではなく……額の上に彼女は一本の赤い線をつけてゐた……ところが、二人の背後には、全身血に塗れた、ペロウソロウが現はれて、蒼ざめた唇を開いて、怒りつゝ、父に強迫してゐた……

それから二月して私は大學に這入つた。そして半年の後に父は（中風）でペテルブルグに逝つた。その少しく以前に父は母と私とを伴つて其處に移轉したのである。彼の死ぬ數日前、彼はモスクワ發

信の一通の手紙を受け取つた。その手紙は父を極度に興奮させた……父は母の元に行き、何か希つた

「それで、その上泪いたとのことである。彼が、私の父が……中風に罹つた其の朝、彼が私に宛てて書かれた手紙には……」

「我子よ、女の愛を怖れよ、この幸福、この悪毒を怖れよ」

彼の逝去後、母は可成りの多額な金子をモスクワに送つた。

三十二

「四年は過ぎた。私は大學を出たばかりであつたので、何をしたらばよいか、何處の門戸を訪れたらば良いか、何にも解らなかつた。で、當座は爲すことなく、ぶらぶらとしてゐた。」

「ある氣持のよい夜、劇場でマイダワツに會つた。彼は結婚し、官職に就いてゐた。私は彼に何等の變化した處を見出さなかつた程變つてゐなかつた。例のやうに直ぐに感激し、忽ち自失するやうであつた。」

「御存知でせう」と彼はいろいろの話の序から云つた。

「ドルスキイ夫人が此處に来てゐますよ」

「ドルスキイ夫人？」

「まさかお忘れなさりはしないでせう？…總べての人が御同様私たちも戀してゐた、ほら、ザシエ
キン公爵の令嬢ですよ。ネスカチニオ園の近くの別荘にゐた、あの方ですよ。まだ覚えてゐらつしや
るでせう？」

「あの女がドルスキイと結婚したんですか？」

「そうですよ」

「で、此の劇場に来てゐられるんですか？」

「いえ、ペテルブルグにです数日前に來たのです。何んでも外國に旅行するんだそうですよ」

「その長人といふのはどういふ人なんですか？」

と私は云つた。

「綺麗な男で、金があるんですよ。私と、モスタワで同じ役所にゐた同僚でした。お解りになるでせ
う…あの一件の後なんです…貴方はそのすべての事を御記憶にある筈ですね…」
（マイダノヴは意味有り氣な微笑をした）

「彼の方は、結婚するには非常に困難を感じたんですよ…何しろ結果が伴ふものですからね…
しかし彼女は賢い人でしたから何事でも爲し了へた譯なんです…まあ行つて、お會ひになつたら

どうです。貴方に會つたらは必つと喜ぶでせうよ。彼女は以前よりも美しくなりましたよ」

マイダノヴはジナイイダの住所を教へて呉れた。デイミウト・ホテルに滞在してゐた。

過ぎし思出が、私の胸にさつてゐた…私は翌日私のこの過去の「戀人」を訪れようと決心した。
しかし種々な用事が勃發した。一週間たち、そしていつか日も重ねてから、遂ひにデイミウトホテル
にドルスキイ夫人を訪ねた時、四日前に、それはほとんど思ひがけなく産褥で急死したといふ事を聞
いた。

私の胸は突き刺されるやうな氣がした。私が彼女に會ふことを欲したならば會ふ事が出來たのに、
相見ずに終つた。そして必つと一生會へないのだ。そうした苦い、退け難い激しい力をもつて、私は
きつと自らの胸をかみしめた。彼女は死んで了つた！と門番を見やり乍ら、勢なく繰り返した。
私は靜かに街の方に引きかへして、何處へとも當なく街を歩きまはつた。一切の過去の事物が、忽ち
眼醒め、私の心の前に立つた。それで、この青春の、燃え上り輝く生命が、あらゆる激しき興奮に於
いて、進み向ふところのものは即ちこれであつたか！この概に沈みつゝ、私は再び彼の貴い面持や、
彼の眼や、彼の卷髪やを思つた…そして、それらは今、狭い檻の中に納められ、暗鬱な、濕めじ
めした地下の闇の裡に瞑目してゐるのだ…私は未だ生きてゐる…私から些程離れてはゐない

おそらくは、私の父からたゞ數歩しか離れてはゐない地にある！

私は斯うした感慨に沈み、想像力を働かし続けた……

「心なき唇により、彼女の死を傳へられぬ……」

心なく我も亦之を聞きぬ」

といふ句が私の胸裡に響いた。

① おも、青春よ、青春よ！ お前にとつてはあらゆるものが何の價値もないのだ。お前は世界中のあらゆる寶物を握つてゐるといふやうな風をする。悲哀憂愁さへも歡び迎え、苦痛懊惱にさへお前は顔を合はせる。大膽で、自信に富んでゐる。お前は云ふ「我のみ孤り生く……汝、見よ！」と。しかしお前の行爲も亦、逃れ、去り、かつ消え失せる。教えられもせず、痕跡もなく、お前に於ける一切のものは、日に向ふ蠟の如く、雪の如く消える……そして汝の魔力の一切の秘事は、おそらくはお前がなす事その總べてのものではなくして、一切を爲し能ふものと考へる、その事に在るのだらう。我々は、自分の事を常に時間の浪費者として考へて、眞面目に、「おも、自分が若し時間を空費さへしな

かつたならば、如何なる事をも爲し能へたであらうに！」

といふべき。権利を持つものであると思ふそのことにあるのである。

私も亦然かく……いかに希望を私は懐いたことであり、いかに期待したことであらう。又いかに未來の大きな幸福を認めたであらう。私は軽く嘆息することもなく、しばしば浮ぶ、我が初戀の影像の陰で、一瞬間たりとも憂鬱な感情に襲はれたことはなかつたか？」

そして私が希望し期待したものは一體どうなつたであらうか？ そして今私の生命に夕邊の影がもうかゝりはじめた。かのあはたゞしくも去り過ぎた早春の、はやての如きその思ひ出よりも、より力あるもの、より貴きものが、果して私の心の裡に残つたであらうか？

しかし、自らを責めることはいけない。

② 浮きたつ心ある青春時代に於いてすら、常に私にまで呼びかけるあの悲しい聲にむかつて、または墳墓の彼方から音響する、かの嚴かな峻しい響きにむかつて、私は聾者ではなかつた。

私はジナイイダの計報を聞いてから、數日後、制壓し難い衝動にかられて、自ら、同じ家に棲む貧しき老婆の臨終に侍つた事を記憶してゐる。襤褸に蔽はれ、堅い板上に横はり、頭に袋を敷いて、彼女は苦しみ、且つ惱みつゝ死んだのである。晝は困窮に暮れ、夜は苦痛に明け、そして彼女の一生は

激しきその生の争闘のうちに終へたのである。彼女はあらゆるもの、喜びを知らなかつた。一度も室のやうな甘い幸福の味を嘗めた事がなかつた。人は、彼女の死によつての欣く淨土を、彼女は有つてゐて、その安息を喜ぶべき筈ではないかと云ふ。しかし尙、彼女は、その老體をもて拮抗し得るかぎり、彼女の氷のやうに冷たく重くなつた手の下に、胸がなほせはしく苦し氣に息づき得る限り最後の氣力が、なほ彼女から離れぬ限り、老母は胸に十字を描き続けつゝ、絶えず

「主よ、我が罪を許し給へ」

とさゝやき止まぬ。

そして其の意識が、肉體の死と共に、無限の宇宙の常闇へと消え去る時、はじめて彼女の顔には、死に對する恐れや、畏きやの表情が共に消え失せる……

そして、この貧しき老婆の臨終の床のわきで、ジナイイダに對する恐怖の爲めに強迫せられたやうに長い間そこで祈禱したことを、私は今に至るまで記憶してゐる。

ジナイイダのために――

私の爲めに――

然して、自分のために……

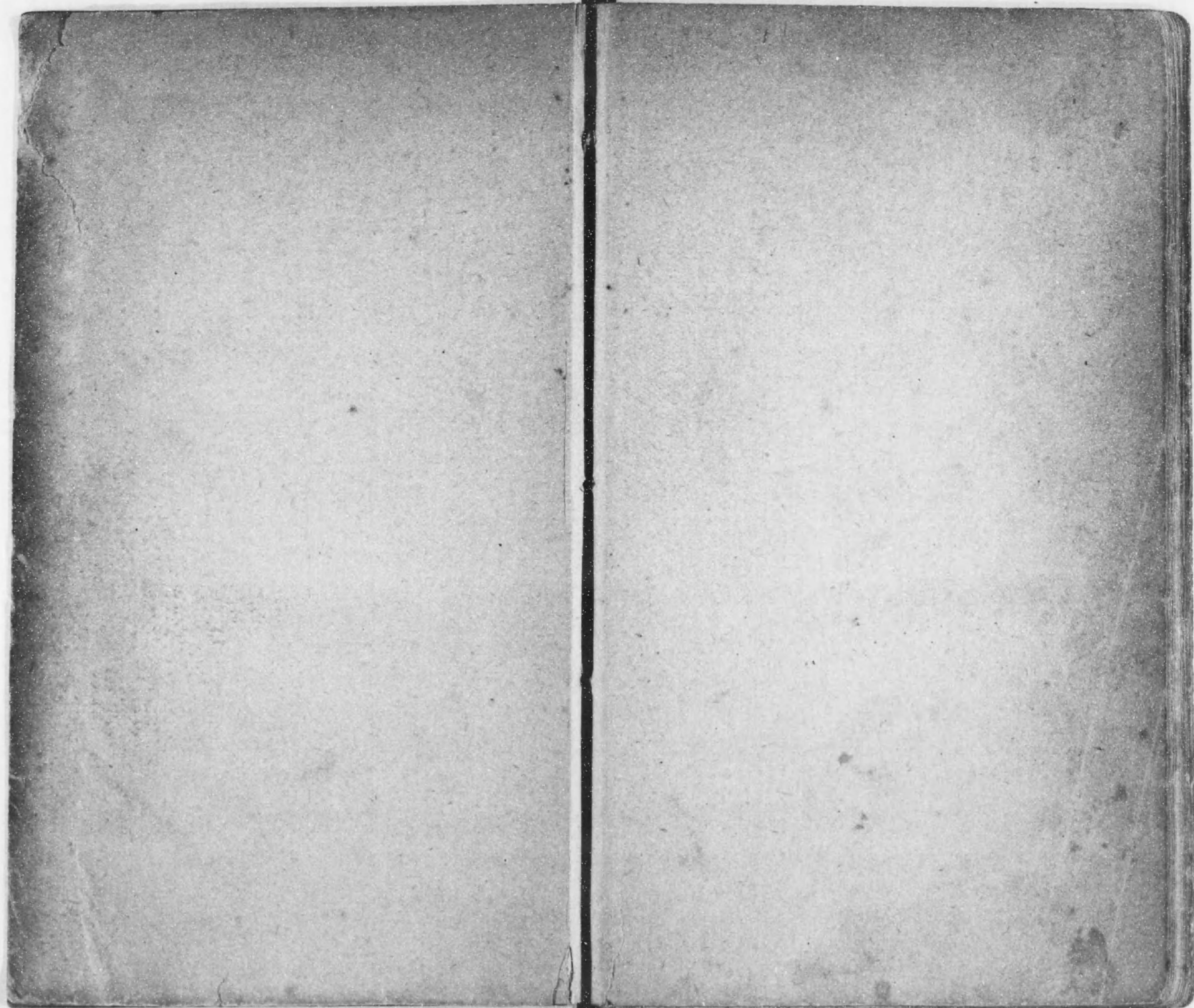
――(終り)――

大正十年七月十五日印刷
大正十年七月二十日發行

ツルゲーニエフ全集第二卷

不許
複製

| | |
|--------|------------------|
| 編輯兼發行人 | 東京市日本橋區本町二丁目八番地 |
| 印刷者 | 尾 |
| 印刷所 | 東京市神田區西小川町三丁目六番地 |
| | 宮田 |
| | 東京市神田區西小川町三丁目六番地 |
| 發行所 | 冬 |
| | 夏 |
| | 電話番町三二二番 |
| | 振替東京四五四六番 |
| | 社 社 六 浩 |



1134



500
20

終

